

# 書物にみる近世神功皇后像の形成と変容

相良 海香子

## はじめに

「三韓征伐」を中心に構成される神功皇后伝説は、『古事記』『日本書紀』をはじめとする歴史書や風土記に採録されて以降、政治・社会・文化のあり方や対外情勢に規定されつつ、現代に至るまで様々に読み替えられてきた。本稿では、近世における神功皇后伝説（以下、伝説と略す場合もある）の受容史の一端を明らかにするために、書物の中の神功皇后像を体系的・時系列的に把握することを試みる。

伝説の受容をめぐる研究は分野を超えて取り組まれてきた。近代化論や国民国家論、ポストコロナリズムを背景に、一九九〇年代以降には、明治期における神功皇后の政治シンボルとしての浮上<sup>①</sup>や韓国併合の歴史的前提として、前近代における伝説の広範な流布が関心を集めた。とくに日朝関係史や日本人の朝鮮観研究では、三韓

征伐伝説は、豊臣秀吉の朝鮮出兵や明治初期の征韓論、韓国併合へと連なる朝鮮侵略の歴史的起点であり、国民心性として「朝鮮蔑視観」を根付かせた神話と位置づけられてきた<sup>②</sup>。これらでは、元寇後に成立した『八幡愚童訓』（後述）が伝説を読み替える中で新たに付加した、皇后が新羅国王を「日本ノ犬」と表現する「朝鮮蔑視」的な逸話が、近世には知識人の朝鮮論から庶民の文芸・演劇にいたる様々な媒体を通して、日本人の朝鮮観に影を落としたことが強調されている。

しかし、これらの研究では、韓国併合を想起させる事例をたどる予定調和的な手法がとられやすく、「朝鮮蔑視観」の問題にのみ議論を帰着させる単線的な歴史理解に限界がある。というのも、宗教史や民俗学からは、神功皇后への安産・成育信仰の事例が報告されており、「武人」や「侵略」だけでなく、「母」や「安産」のイメージもあつた<sup>③</sup>。さらに古代文学研究からは、古代・中世においてさえ対朝鮮観の問題としてのみ伝説を理解するのは不十分と指摘されて

いる。<sup>(4)</sup> それゆえ、朝鮮観や植民地主義的発想に必ずしも括られない多様な文脈を念頭に、近世における広範な「読み」を再検討する必要があるだろう。

また、美術史や表象文化研究では、明治初期の企業公債や肖像紙幣に描かれた神功皇后像が注目され、比較の観点から近世に言及されている。<sup>(5)</sup> ただし、部分的言及にとどまり、包括的・時系列的な分析は行われていない。

そこで本稿では、近世における伝説の受容を考えるにあたり、書物を素材に神功皇后像の総体的・時系列的な解明を試みる。近世は出版文化が隆盛し、購入・貸借・筆写を通して各地に書物が広まり、情報と知が大衆化された「書物の時代」であった。それゆえ書物は、読者層や流通圏の広さから受容者の階層性・地域性の問題がある程度克服できるとともに、<sup>(6)</sup> その挿絵には出版当時の流行や読者の嗜好性、地域的特性をみることができるとも、<sup>(7)</sup> これらの点に着目し、本稿では主に庶民層向けに作成された教養・娯楽系の書物を対象に、近世の人々が神功皇后について抱いていた具体的なイメージと、時期ごとの変容のあり方について、書物のジャンルや出版文化の状況に留意しながら検討する。

本論で用いる史料は、近世刊本の集成や、<sup>(8)</sup> 資料機関、データベースを活用して収集し、神功皇后の記事を掲載する書物を計二二四件得た。これらをもとに、近世前中期（一七〜一八世紀頃）、近世後期〜近代初頭（一八世紀末〜一九世紀頃）に分析時期を設定し段階

的な検討を行う。以下、第一章では議論の前提として、中世の神功皇后像と、近世における神功皇后に関する知識の普及状況を把握する。その上で第二章では近世前期〜中期を、第三章では近世後期〜近代初頭を対象に、出版文化の状況を背景に、どのようなジャンルにいかなる神功皇后像がみえるかを検討する。

なお本稿では、「神功皇后像」という語を書物に現れた神功皇后のイメージを指すものとして用い、表象分析を中心に論じる。また、全体的・時系列的な把握が目的であることから、個々の作品の性格や作者の問題等について詳細な分析を行わなかったことは予め断っておきたい。

## 第一章 議論の前提―中世神功皇后像と

### 近世における知識としての普及

本章では、『日本書紀』<sup>(10)</sup>（以下『書紀』）の仲哀天皇紀・神功皇后撰政前紀から伝説を確認した上で、中世における神功皇后像を把握する。加えて、近世以降に神功皇后に関わる知識の普及状況を検討することで、本論の前提としたい。

#### 第一節 伝説の概要と中世における展開

神功皇后の夫・仲哀天皇は、筑紫国で熊襲討伐中に財宝豊かな新羅国へ出兵するよう神託が降るが、従わずに急死した。その時臨月

にあった皇后は、胎児に帰国したら生まれよう言い聞かせ出船する。皇后軍が起こした高波に恐れた新羅や高麗・百済の諸王侯は毎年日本に朝貢することを約束し降服する。帰国後、皇后は筑紫で誉屋別皇子（後の応神天皇）を出産する。翌年、皇子の異母兄の麿坂王・忍熊王が謀叛を起こすも大臣・武内宿祢の軍勢に敗れる。その後群臣らは皇后を皇太后に立てた、というのが伝説の大筋である。

その後室町時代にかけて、朝廷支配に属さない集団との関係や対外情勢の中で伝説は度々想起され、宗教・思想・文学の影響を受けつつ読み替えられた。<sup>12</sup>元寇に尽力したとする八幡大菩薩の霊験を語る石清水八幡宮の『八幡愚童訓 甲本』（以下『愚童訓』）はその代表作で、蒙古襲来の前史に三韓征伐を位置づけた。ここでは、三韓征伐は日本に侵攻し仲哀を殺害したことに対する報復譚とされ、皇后が「新羅国ノ王ハ日本ノ犬也」と表明した逸話が付加されるなど新たな脚色を加えられた。

中世の神功皇后像をうかがえる視覚メディアに、八幡信仰の布教を目的に作成された八幡縁起絵巻がある。前半は神功皇后の三韓征伐が、後半は応神天皇が八幡大菩薩として祀られる経緯を描いたもので、甲乙二種類の系統があり、乙類には『愚童訓』の影響がみられる。<sup>13</sup>これらは中世から近世にかけて主に写本で流布し、第二・三章でみる近世書物にも影響した。

神功皇后が出る前半部分は、仲哀が新羅より襲来した「塵輪」との戦いで死亡し（乙類のみ）、遺勅により三韓へ出兵、その途中遭

遇した住吉大明神や、潮の干満を操る早珠満珠を献上した「磯童」らの援助で、新羅軍を壊滅させ戦勝の碑文を刻み、帰国後に筑前国の産屋で応神天皇を出産するという展開である。また甲乙類とは別系統で、高良大社所蔵『高良大社縁起』など四種の掛幅式縁起絵が九州に残る。<sup>14</sup>甲乙類との違いの一つは、皇后が出兵前に肥前国松浦川で行った「アユ釣り占い」と筑前国檀日浦で行った「髪占い」という、『書紀』の逸話をもとにした図像がみえる点である。

中世に作成された以上の縁起絵（巻）の共通点は、神功皇后を平時は十二単の女房装束姿に、戦時は大鎧（平安末期）室町時代の甲冑を着た男性的な武者姿に描き分けることである。<sup>15</sup>『愚童訓』は三韓征伐を、戦に不慣れで武装が不似合いな皇后が胎児に「応神天皇」八幡神の神力を借りて勝利する物語として描き、神功皇后像は母性的・女性的側面が強いと指摘されている。<sup>16</sup>縁起絵（巻）における服飾の描き分けも、こうしたイメージが影響していたのではないだろうか。その後近世にかけて八幡縁起絵を継承した書物には、奈良絵本の『八幡の本地』<sup>17</sup>や『武家繫昌』<sup>18</sup>、寛文四年（一六六四）刊行の絵入版本『八幡愚童訓』<sup>19</sup>があり、中世の伝統的な素材・表現が継承されている。

## 第二節 近世における知識としての普及状況

具体的な人物像の検討に入る前に、近世における神功皇后に関する知識の普及状況を、節用集という字書と年代記という歴史書の中

表1 神功皇后関連の記事・挿絵を掲載する特徴的なジャンル一覧

	節用集 (収録語彙)	年代記(冊子/ 節用集等付録)	年代記 (公家鑑付録)	女訓書	武者絵本	名所図会	往来物 (歴史系)	軍記物・ 絵本読本
中世～ 近世前期 (17世紀)	10	6	0	3	0	0	0	1
近世中期 (18世紀)	30	20	0	11	9	2	3	0
近世後期 ～明治初期 (19世紀)	25	16	28	7	8	4	22	6
総計	65	42	28	21	17	6	25	7

心にみていきたい。なお、表1には本稿で扱う神功皇后関連の記事や挿絵を掲載する書物を、顕著なジャンルに限定して時期ごとの件数を整理した。適宜参照されたい。

(1) 節用集の変遷と神功皇后

節用集とは、中世後期(一五世紀)に誕生したイロハ・意義検索の用字集である。当初は知識人層向けであったが、一七世紀前後から商業的に出版され始めると、購買者層を拡げるための工夫が重ねられる。寛文期頃から大衆化傾向をみせ、収録語彙は通俗用語へ変化・増加し、六〇〇種ほどが刊行された<sup>(20)</sup>。節用集はまさに、通俗・教養レベルでの語彙を知り得る指標といえる。本稿の調査では神功皇后関連記事(字書収録語彙、付録記事、もしくは両方に)載せる節用集を計八二種得た。以下では、字書本文にいつ・どのようにして神功皇后という語彙が定着するかをたどる。

中世節用集では、室町時代中期に成立した古本『節用集』<sup>(21)</sup>と、永禄八年(一五六五)以降成立の『経亮本節用集』<sup>(22)</sup>が該当する。前者においては「神馬草」という語の説明文中に、後者では「脇楯」の説明文中と「人名」の項目に神功皇后がみえ、最も早い時期の事例といえる。ただし、これ以降近世前期までの節用集には管見の限り確認できなかった。

一七世紀半ばに収録語彙数が増加する傾向に伴い、寛文五年(一六六五)刊行の『真草二行節用集』<sup>(23)</sup>(京都・武村三良兵衛)において、

「神宮皇后」が「し」部門に現れる。それ以降近世全時期にわたり収録語彙に定着し、本稿の調査では明治初期まで計六五種に確認できた。「し」部門には他に、聖徳太子や慈覚、慈恵、釈迦、親鸞聖人といった仏教関係の人名がみられる。これらは中世節用集を継承したもので、そこに新たに神功皇后が加わったのである。

貞享・元禄期以降は、多種多様な節用集が販売された。なかでも、頭書や巻頭・巻末に付録として記事や挿絵を掲載した形態は顕著で、それらにも神功皇后は登場する。元禄三年（一六九〇）刊行『頭書大益節用集』<sup>24</sup>（京都・津田宗智、山本五兵衛）の頭書には、収録用語の「神功皇后」について、「八幡の御母なり四月十五日崩」と解説される。さらに同四年『頭書大益節用集』<sup>25</sup>（京都・鍵屋善兵衛）の付録記事には皇后が「アユ釣り占い」をする挿絵が掲載され、同六年『大海節用和国宝蔵』<sup>26</sup>の付録記事である年代記では、歴代天皇のなかで「十五代 神功皇后」として紹介されている。さらに一八世紀初頭から、女性の教養に特化した節用集が刊行される中、宝永六年（一七〇九）初刊『女節用集罌囊家宝大成』<sup>27</sup>（江戸・須原屋茂兵衛、大坂・秋田屋市兵衛）には、付録「女武者物語絵抄」で日本の「女武者」の筆頭に神功皇后が絵入りで紹介されている（挿絵や年代記、女訓書については後述）。

付録記事の充実化が進む一方で、宝暦期頃より、付録を掲載せず、に実用性・簡易性を志向した早引節用集が登場する。イロハ・読み仮名数検索で語彙を厳選したもので、宝暦二年（一七五二）の山下

重政『宝暦新撰 早引節用集』（江戸・西村源六、大坂・渋川与一・村上伊兵衛）以降広汎な利用者を獲得し、明治期に至っても簡便な節用集として人気を博した。<sup>28</sup> 同書をはじめ、宝暦八年『袖中節用集』<sup>29</sup>（大坂・鳥飼市兵衛ほか一書肆、江戸・結崎次郎兵衛）や明和七年（一七七〇）『早引節用集』<sup>30</sup>（松本・白木屋与兵衛）等、明治期まで計二五種に神功皇后を確認した。廉価かつ小型で実用的な早引節用集にも収録されたことは、経済的下層の人々にも身近な知識であったことを推測できる。

以上、節用集の大衆化傾向に伴い神功皇后が収録語彙に定着する過程を明らかにした。寛文期頃に定着して以降、一般的な種類・形態のみならず、一八世紀以降は女子用節用集や早引節用集にも収録されたことは、男女問わず幅広い層の人々が日常的に検索・参照する語句であったといえよう。

## （2）年代記にみる歴史的教養知識としての伝説

次に、神功皇后が登場する節用集の付録記事の事例として、年代記に着目したい。歴史上の事件・人物を年代順に記述したもので、公的な六国史から私的な史書まで古代から編纂されてきた。近世には商業的に出版され、冊子体や一枚摺の単体にとどまらず、節用集や公家鑑の付録記事にも組み込まれる。本稿の調査では、単体・付録記事いずれかで計七〇種を得た。

慶長一六年（一六一一）の『和漢皇統編年合運図』（円智編）や、



幕府儒官・林鷲峰による『日本王代一覽』を先駆に、歴代天皇を扱う年代記一般において、神功皇后は「人皇十五代」、すなわち歴代天皇一五代目の治世を担った人物とされている。『日本王代一覽』は寛文四年（一六六四）に和文版が刊行され、民間で刊行される年代記に影響し、元禄期頃からは挿絵入も登場する。

日本史の「入口」として、また「参照系」としての役割を担っていた年代記に挿絵が加わることで、読者は視覚情報として歴史を把握することができた。<sup>(31)</sup>元禄五年（一六九二）『新補倭年代記繪章』<sup>(32)</sup>（京都・伊賀屋久兵衛ほか一書肆、大坂・伊丹屋太良右衛門、江戸・伏見屋兵左衛門）は、現在確認できる最初期の絵入年代記で、神代から元禄五年三月までを扱う。歴代天皇記には「十五代 神功皇后」とみえる。皇后の経歴を記した本文は概ね『書紀』の要約で、これは他の年代記と同様である。同書の挿絵は三枚で、一枚目は「アユ釣り占い」図、二枚目は「髪占い」図、三枚目は大魚に囲まれた皇后の軍船を目撃して逃げる新羅国の兵士が描かれている。そして、以降の年代記などの書物には、右の挿絵と類似した図像が多数確認できる。

冊子体の登場以降、節用集にも絵入を含む年代記が組み込まれていく。先述の『大海節用和国宝蔵』は頭書に年代記を設け、神功皇后の挿絵は『新補倭年代記繪章』の「アユ釣り占い」図像と相似する。また、日本版武將伝『本朝百人武將伝』<sup>(33)</sup>（宝永七年、一七一〇刊、大坂・野村調兵衛、京都・荒川源兵衛）の頭書付録「大日本国王年

代記」の挿絵は『新補倭年代記繪章』の三枚目の挿絵と類似する。先行する年代記の模倣・流用が繰り返されることで、記述・挿絵双方に共通の型が生み出されたと考えられる。

以上のように、当時の通俗・教養レベルの歴史知識を掲載する年代記に神功皇后に関する知識や視覚情報がみられることは、伝説が庶民にも日用的な教養知として受容され、人物像が共有されていたと想定できる。次章以下では、本節でみた知識としての普及状況をふまえて、具体的な神功皇后像を検討していきたい。

## 第二章 近世前中期の書物にみえる神功皇后像

本章では、一七〜一八世紀に神功皇后関係の記事がよくみられるジャンルとして、女訓書と武者絵本を扱う。なお、主眼は当該期に始まる特徴を捉えることにあるため、近世後期にみられる場合でもその作品に適宜言及している。

### 第一節 女訓書

近世にはじつに数千種の女子向け書物が刊行され、しばしば神功皇后が登場した。最初期の日本版列女伝で神功皇后を取り上げたものには、『本朝女鑑』<sup>(34)</sup>（以下『女鑑』）がある。仮名草子作家・浅井了意の作品で、寛文元年（一六六〇）に京都・西村又左衛門から板行された。商業出版が本格化し、中国との差異化を模索した日本版の

列女伝が作られる中で、『女鑑』や寛文八年刊の黒沢弘忠『本朝列女伝』はその嚆矢にあたる。『本朝列女伝』巻一〇「神女伝」、および『女鑑』巻一「賢明」は神功皇后伝を立てており、近世前期には日本を代表する列女とみなされていたことがわかる。

さて、『女鑑』の古代から戦国期の女性計八五名の事蹟を徳目ごとに紹介した一〇〇巻のうち、巻一の「賢明」部門には神功皇后や衣通媛、上野形名妻、檀林皇后、北条政子らがみえ、「知恵かしくく」「才智並びなし」といった表現が多用される。近世の刊本としては最初期に神功皇后の挿絵を掲載したものであり、後年に刊行される書物・絵画とも共通点が多いため、まずその特徴をおさえない。

#### (1) 『本朝女鑑』の神功皇后伝

『女鑑』における叙述全体の基底は『書紀』で、所々に『愚童訓』や『太平記』を参照し創作を加えている。<sup>(35)</sup> 例えば、熊襲討伐や三韓征伐は神託ではなく皇后自らが天皇に進言したとする読み替えは、「賢明」伝との整合性をはかるためといえる。朝廷に背いた熊襲を「夷の千嶋の国」、すなわち蝦夷地の異民族に措定するのも独自の設定である。また、三韓を降服させ皇后が盤石の表面に「新羅高麗百済の大王はわか日本の犬なり」と刻む中世発生の場面が採用される一方で、麿坂王・忍熊王の謀反を武内宿祢軍が鎮圧する、『書紀』にあり中世にはあまり受容されない場面も記される。『書紀』を基

軸に中世作品等を取捨選択し物語の充実化をはかる手法は、後述の書物と共通する。

次に、『女鑑』に掲載された神功皇后の挿絵二枚をみる。これらの皇后はいずれも大鎧姿で、男性家臣を従えている。一枚目は『書紀』の逸話の「アユ釣り占い」図、二枚目は軍船上の皇后に向かつて陸上から三韓王が降服する図である。第一章で述べたように、中世の神功皇后像は、非戦闘場面では女房装束、三韓出兵では大鎧を着る男性的服飾が特徴であった。一方『女鑑』では、戦闘・非戦闘場面にかかわらず大鎧姿で描かれており、後述する後世のほとんどの書物や錦絵も同じである。大鎧をまとい男性家臣を従える「女武者」神功皇后像が、この時期には確立していたといえる。

#### (2) 女訓書のなかの神功皇后像

『女鑑』以降多種多様な女訓書で神功皇后は特集され、本稿の調査では計二一点に確認できた。それらでは、「本朝」を代表する「女武者」「名女」「賢女」で、男性に比肩する知力・武功や政治的手腕をもつ女性として称賛されている。

特集の例をあげると、前掲の宝永六年初刊『女節用集罌粟家宝大成』およびその増補改訂版である宝暦一二年(一七六二)『女節用集文字囊』<sup>(36)</sup>(大坂・河内屋八兵衛ほか一書肆)の各付録「女武者物語絵抄」、延享三年(一七四六)往来物『靚粧宿直 百人一首至宝袋』<sup>(37)</sup>(大坂・泉屋喜太郎)の付録「本朝三賢女」、宝暦一三年『教

訓彙方・頭書絵抄・当流女諸礼 女今川姫鏡<sup>38</sup>（京都・菊屋七郎兵衛）の付録「和国名女」、文化八年（二八一）『錦葉百人一首 女宝大全』<sup>39</sup>（名古屋・永楽屋東四郎、江戸・蔦屋重三郎）の付録「和国賢女絵伝」等である。

ここでは、「女武者」の筆頭に神功皇后を掲げる『女節用集譽粟囊家宝大成』の「女武者物語絵抄」を例に検討したい。冒頭は「かいくは天王（＝開化天皇、引用者注。以下同）の御ひまご仲永の大君の御むすめにて仲哀天皇の御きさき也」「幼くましませし時より御かたち世にすぐれ。おんちえいたりてさかしくよくみちををこなひ給ふ」と皇后の家系と容貌・性質について『書紀』に基づく描写がみえる。続く「然るにえぞが鳴（＝蝦夷地）より御つぎ物をそむきて奉らざりければ天皇大にいかり給ひ。大將くまをそ（＝熊襲）といふ者を討たんとて」の部分には、前項（1）でみた『女鑑』独自の設定の影響がうかがえる。三韓征伐については、「皇后は武内のすくねと御くはだて有て其あた（＝仇）をほうじすくに高麗をしたがへ給へは。新羅百済の王もともに出来りて日本にしたがひみつぎ物を奉るべしとかうさん仕りたり」と、夫・仲哀の仇討譚とされている。仇討として三韓征伐を読み替える点は『愚童訓』と同様だが、「女武者物語絵抄」が他にも田道妻、形名妻、北条政子、和泉三郎妻、巴御前、楠正行の母等、亡き主人のために戦闘に出たり賢明な行動をとった女性を収録していることから、同特集の文脈に合致する設定であったといえる。

このように「女武者物語絵抄」は、夫の敵討という女訓の文脈に適した読み替えを行っていた。また、『書紀』をベースにしつつ、皇后の家系や性質、三韓征伐の経緯を略記する形式や、挿絵に「アユ釣り占い」の図を用いるところなどに、年代記や『女鑑』との共通性を指摘できる。

さらに女訓書に特有の語りとしては、神功皇后を例に読者に向けて女性であっても卑下したり軽蔑してはならないと戒める教訓がみられる。北村季吟の万治四年（一六六一）『女郎花物語』<sup>40</sup>（京都・中野小左衛門）下巻は、皇后の事績を述べた後、「なべて女ははかなくつたなき物とのみ、みづからおもひくたすべからず、心をだにもちひ侍らは、いかでかおとこにことなるべき」という。ほぼ同じ文は宝暦六年の西川祐信画『女教文鑑 雛鶴百人一首花文選』<sup>41</sup>（江戸・鱗形屋孫兵衛）の付録「日本人略伝 貞女の部」にもみえる。また文政七年（一八二四）の往來物『最明寺殿仮名式目』<sup>42</sup>（葛飾北斎画）では「女なればとていやしむべからず天照太神は女体にてまします又神功は玉姫にて后と現じ給ひしかども新羅国を攻從へ給ふ」という。

さらに、神功皇后を筆頭に武勇や貞操に長けた賢婦を描いた宝暦七年の月岡雪鼎画『女武勇粧競』<sup>43</sup>（大坂・大野木市兵衛）は、巻頭序文において「やまと島根ハ婦徳のすぐれたる丈夫に劣らさざりとて牝鶏且するのたくひにしもあらず」と、日本婦人は徳が高く男性に劣らず、儒教経典の『書経』にみえる「牝鶏晨す」、すなわち



女性が男性にかわって権力を握ることで災いを招くようなことがないことを強調する。それは、「艶色を以て国を傾け奸悪にして主を陥の類」が多い異国とは違い、日本女性は「夫に倣ふて三徳を兼備せる」ためであるとする。

このような言説は、例えば工藤平助の娘・只野真葛が『独考』（文化一四年（一八一七）成立）の中巻において、天照大神につづき神功皇后や紫式部の名をあげて、「女たりとも、などか心を起こさざらめや」と記しているように、近世に生きる女性を鼓舞する「先例」として実際に受容されていた。<sup>(44)</sup> 男性作者による一方的な言説にとどまる女訓ではなかったのである。

以上のように女訓書の神功皇后像は、甲冑を着て戦う強く賢い「女武者」として表象され、女性の能力への軽視に対する戒め・教訓をも生み出し、実際に女性が自己同一化する対象となっていた。ただし同時に、夫の敵討として三韓征伐が解釈され、「心をだにもちひ侍らは、いかでかおとこにことなるべき」や「夫に倣ふて三徳を兼備せる」といわれたように、男性を基準・前提とした女性評価であったことには留意すべきである。男性にまさる才知・武功を称賛する言説と、あくまでも男性の存在を前提とする価値観との微妙なバランスの上に、女訓書の神功皇后像は成立していたのである。

## 第二節 武者絵本

「女武者」神功皇后像は、武者の姿や戦闘場面を描いた武者絵本

にも人気の素材として登場し、明治期まで長く出版され続けた。その類別は、武者の図像集「武者尽くし」類、合戦の顛末を描く「合戦物」、武者の伝記「一代記物」に大きく分かれ、<sup>(45)</sup> 神功皇后が登場するのは「武者尽くし」で、本稿の調査では計一七種を確認した。同時に取り上げられる武者は、素戔嗚尊や日本武尊以下男性が占める。

神功皇后を扱った最も早い時期の作品に、正徳四年（一七一四）の山本序周作・橋有税画『絵本故事談』<sup>(46)</sup>（江戸・須原屋茂兵衛、大坂・大野木市兵衛）がある。序文には「善行ヲ記シテ以テ之ヲ読スハ則善以テ遷ルベク悪以テ懲ラスベシ」とあり、勸善懲惡的な教育観が示される。卷一収録の「神功皇后」には、「天王の讎熊襲を亡給ひ并に新羅百濟高麗を打したがへん」と、夫の仇討として熊襲討伐と三韓征伐を行ったとして、序文の勸善懲惡的な価値観に適合する解釈になっており、前節でみた女訓書とも共通する。

「武者尽くし」類には教育目的以外にも、絵手本としての性格のものも幕末まで刊行された。享保五年（一七二〇）の橋守国画『絵本写宝袋』<sup>(47)</sup>（大坂・洪川清右衛門）は序文において、作画には「規矩」や「画本」が必要であると述べ、絵手本であることを謳っている。卷二の「武将勇士之図」のうち、「脇楯始」の項目には鉢巻と大袖・草摺・脇楯・大刀を身に着け、軍配を手にする皇后と、傍に跪く武内宿祢の図がある。また別項の「神功皇后」には、「三韓の軍に勝たまふとき消にて大石に文字を書きたまふ図」という説明通りに、

兜を被る大鎧姿の皇后が馬上から弓で石面に文字を刻む図がみえる。これらには装飾の様子が繊細に描き込まれている上に、構図や配置はシンプルで印象的であり、まさに絵手本にふさわしい。三韓王の降服を描いた他の武者絵本には、寛延二年（一七四九）の西川祐信『絵本勇武鑑』（京都・菊屋喜兵衛）や、宝暦二年（一七五二）の寺井尚房『絵本勇名草』（大坂・岡田三郎右衛門）、歌川国直『絵本武者袋』（江戸・頂恩堂本屋又助）等がある。

また、絵手本目的の武者絵本には、神功皇后と武内宿祢をペアで描く挿絵も多くみられ、天明二年（一七八二）の鳥居清長『絵本武智袋』（江戸・伊勢屋治助）や、有名なものでは葛飾北斎の天保七年（一八三六）『絵本武蔵鑑』、同一二年『名頭武者部類』がある。『絵本武蔵鑑』は見開きの図で、弓で岩面に文字を描く皇后を、武内が見上げる姿勢で配置され、岩面には「金甲六具を滞して其動自在に屈伸骨格を失わず」と描画の指南書きがみえる。<sup>(48)</sup> また『名頭武者部類』には、それよりも小さく簡略化された皇后と武内の画像がみえる。<sup>(49)</sup> 次節で整理するように、神功皇后像に一定の類型を確認できるのは、絵手本に採録されたことも大きいと考えられよう。

### 第三節 近世前中期における神功皇后画像の類型

ここまでの検討をふまえて本節では、近世前中期に顕著な神功皇后画像の類型として次の三点を指摘したい。なお表2には、本稿の調査で得られた計一三九件の画像史料の主な類型を、便宜的にA～

表2 挿絵の主な類型

	A. 出兵前 (神事/ 宝珠献上等)	B. アユ 釣り 占い	C. 髪占い	D. 軍船 (出兵/ 帰国)	E. 戦闘	F. 三韓 王の 降服	G. 二王 反乱	H. 帰国後 (出産/ 皇太后即位等)	I. 神功・武内 (従臣)/+ 応神天皇	J. 神功 皇后 单身	総計
近世前期 (17世紀)	7	6	2	3	5	4	0	1	1	0	29
近世中期 (18世紀)	1	18	3	6	0	4	0	0	7	3	42
近世後期 (19世紀)	5	6	1	5	6	14	3	5	17	6	68
総計	13	30	6	14	11	22	3	6	25	9	139



図3 元禄11年(1698)『絵入太平記』  
卷39「神功皇后新羅をせめ給ふ事」  
(立命館大学 ARC 古典籍ポータルデータベース公開)



図1 万治4年(1661)  
『女郎花物語』  
(早稲田大学図書館所蔵)



図4 元禄5年(1692)『新補年代記絵章』  
(早稲田大学図書館所蔵)

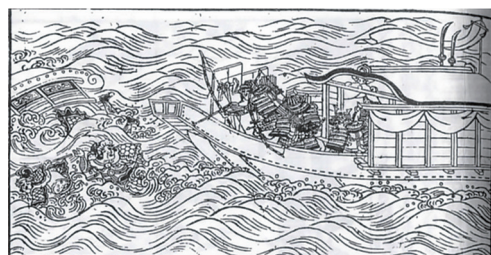


図2 宝暦13年(1763)『女今川姫鏡』  
「和国名女 神功皇后」  
(『往来物大系』86、大空社、1994年)

』として整理した。

第一は、中世の絵巻にみえる伝統的な素材・表現を継承した類型である。D「軍船(出兵/帰国)」、(図1)、E「戦闘」(図2)、F「三韓王の降服」(図3)がそれにあたり、Fはとりわけ絵手本的性格の武者絵本に多いことは前節で述べた。絵手本として、皇后の骨格や甲冑・武具を明瞭かつ躍動的に表現するために、これらの場面が適していたものと考えられる。

第二は、近世に始まる特徴で、寛文期頃から一八世紀にかけて、B「アユ釣り占い」(図4)が多くみられることである。「アユ釣り占い」伝説の受容については拙稿で論じたため詳述しないが、本稿の挿絵調査では最多数の三〇件を確認しており、一八世紀をピークに節用集や年代記、女訓書、武者絵本と幅広くみられることから、ジャンルを超えて皇后のアイコンとして定着していたと考えられる。樹木を背景に、水辺や岸に立ち釣竿を手にする皇后を中心に、傍らに武内宿禰など男性武者を描くのが一般的である。

第三は、皇后に近侍する老臣・武内宿禰像が一八世紀前後に確立することである。なかには武内が赤

子の応神天皇を抱く図やその他多くの家臣を従える図もみえる。中世から近世前期までは、武内と他家臣との容貌はあまり区別がなかった。明確な差異化が進む背景には、明暦期以降に林家や民間から刊行された「百将伝」（日本史上の名武将百人を選定し絵入で解説したもの）の影響も考えられ、三韓征伐や忍熊王・麿坂王の反乱鎮圧等で活躍した老武者のイメージが反映されたと推測できる。やがて神功皇后と武内宿祢を一对で描く「神功・武内」図は、近世後期にかけて量産されていく。

これらの他にも、A安曇磯良が皇后に宝珠を献上する場面（中世に創作された逸話）や、C「髪占い」を行う場面（『書紀』にみえる逸話）などの図像も数点確認できたが、右の五類型を近世における典型とみて良いだろう。

書物文化の展開のなかで、神功皇后像には中世作品における伝統的な表現・素材を継承・発展させたものと、新たに図像化されたものとがみられた。また皇后の服飾は、中世では戦闘・非戦闘場面で明確に描き分けられていたが、近世には場面に問わず、大鎧や武器を身にまとう「女武者」像が確立・定着していたことがわかった。

### 第三章 近世後期の書物にみる神功皇后像

前章であげたジャンルは近世後期以降も刊行され続ける。本章では、一八世紀末頃から一九世紀において神功皇后記事を扱う特徴的

なジャンルとして、①名所図会、②歴史科往來物、③絵本読本に着目して検討する。

#### 第一節 名所図会

一八世紀後半、各地の名所旧跡の解説に見開きの挿絵を加えた名所図会が登場する。その始発は秋里籬島の『都名所図会』で、以後全国各地のものが刊行された。この地誌編纂ブームの中で神功皇后伝説は、近江、住吉、和泉、播磨、紀伊、長崎、筑前という西日本地域に登場する。

文化元年（一八〇四）刊行の『播磨名所巡覧図会』<sup>51</sup>（秦石田編著、中江藍江画）にはとりわけ多い。巻一収録の「六甲山」は、皇后の時代に忍熊・麿坂両王の反乱鎮圧後に王子の「甲首」を埋めたことが山名の由来であるという。巻二収録の「名所 上野山祥福寺」の境内には「神功皇后釣竿竹」があるといい、近世前期から書物の挿絵に多くみられた「アユ釣り占い」伝説が地域社会に受容された事例として興味深い。この他にも、巻一には「名所 広田社」「名所 御前沖」、巻二では「事代主神祠」等に伝説がみられた。また、伝説とは直接の関係のない地域の「長崎名勝図会」<sup>52</sup>（近世後期成立）巻三でも、皇后が水を飲んだという「神功井」、水鏡を見たという「鏡井」、腰かけたという「皇后腰掛石」を紹介する。

名所の歴史に神功皇后伝説がいつ・どのような経緯で取り込まれたか、また実際に現地を受容されたかは検討の余地があるが、近世



後期には、伝説が地域や名所の歴史的価値を高めるものとして広範に認識されていたことがわかる。

## 第二節 歴史科往来物

地域の歴史にとどまらず、日本の歴史としても伝説は読み替えられていく。国史上の重要な人物・事件として伝説が解釈された事例として、歴史科往来物に着目したい。近世には往来物という手習書が大量に流布したが、その種類の一つに歴史を題材にした歴史科往来物という系統がある。<sup>(53)</sup>このうち神功皇后に関する記述が最も豊富なのは、史詩型という事件や人物を結び合わせる歴史教科書的な往来物である。形態には、三〜五字の漢字で一句とする漢詩や、仮名交じりの七五調など、詩の形で全編を一貫させたものがあり、一八世紀後期以降徐々に増加し幕末維新时期にかけて流行した。

史詩型の先蹤は安永四年（一七七五）に大坂・書物屋久蔵、田原屋平兵から「貝原益軒先生遺稿」として刊行された『素読 本朝千字文』<sup>(54)</sup>と、同年同板元から出た戸川後学による注釈絵入版『本朝千字文 傍注』<sup>(55)</sup>である。「千字文」というのは漢詩四字一句を全二五〇行、合計千文字で綴るためで、素読版の巻末広告文によると、両書とも児童の学習目的で作成された。日本開闢の天神地祇から始まり、神武天皇以下日本史上の特筆すべき事件や天皇・皇族、武士、学者らの事績を叙述し、最後は徳川泰平の世への賛辞と読者への勸学で締めくくられている。神功皇后については本文中に、「息長帯

姫 征伐三韓 赤猪鬻王」とある。傍注版には、「皇后みかどの志をついで三韓ヲせいばつし給ふ」、「忍熊王と麿坂王とむほんをおこし神功皇后これをうち給ふそのとき赤きいのし、出てかゝ坂王をかみころせしとなり」と解説がある。仲哀の意志を継ぎ三韓を征伐したという解釈は、女訓書や武者絵本にみられた敵討とする読みに近く、また二王の反乱鎮圧伝説を採録する点は、三韓征伐以外の伝説の多様な場面が着目されていたことを表している。

時期を隔てた嘉永・安政期より、「千字文」や三字の漢詩を並べた「三字経」形式の史詩型が急増する。序文や巻末広告で「童蒙」の学習目的で作成されたと謳われるように、初学者でも暗誦しやすく簡潔な文体で綴られている。古代では神武天皇や日本武尊、仁徳天皇等とともに神功皇后が挙げられている。嘉永六年（一八五三）に刊行された鶴鶴齋春水撰・葛飾為齋画『絵入 皇朝三字経』（京都・出雲寺文次郎、大坂・河内屋茂兵衛、江戸・英大助、英文蔵）をはじめ、安政三年（一八五六）『皇国三字史』や同五年『本朝三字経』、『本朝千字文』の改版の明治初年『皇朝千字文』など、「皇朝」「皇国」の語がタイトルに掲げられる点は安永期と異なる特徴である。これについては、国学による「皇国」「皇朝」という語や、幕府の出版統制の変更を契機とする尊王思想の流行を背景に想定できる。<sup>(56)</sup>例えば、明治初年の『皇国千字文』と同三年（一八七〇）の注釈書『皇国千字文解』の編者藤川忠猷は、過激な攘夷論主張が原因で高松藩に幽閉された経歴の人物であったことは示唆的である。<sup>(57)</sup>



嘉永期以降の史詩型にみえる特徴は、神功皇后時代については他の諸事件・逸話が省かれ、三韓征伐に焦点化されることである。嘉永六年『絵入 皇朝三字経』<sup>58</sup>では、本文に「征新羅」 神功績 武内臣 能謀敵、その頭書に「十五代神功皇后新羅にうち入給ひしとき武内の大臣敵軍をうち破りしなり」とある。また「三字経」の形態としては、安政五年『本朝三字経』<sup>59</sup>に「若神功 犯矢鋒 征三韓 成附庸 收貢物 討不共」とあり、同系統の史詩型往来に踏襲されていく。

国史の系統的叙述の試みは、万延元年（一八六〇）『大日本国開闢由来記』のような絵入歴史書とも共通する。第一章でみた年代記は、人物・事件同士の関連付けはなく、単に時系列的な歴史叙述であったのに比べるとその差異は明瞭である。神功皇后が歴史上の重要人物として整理される過程で、三韓征伐に国史上の意義をみる認識が強化されたのである。

史詩型以外の歴史科往来物には、十返舎一九による『神功皇后三韓平治往来』<sup>60</sup>がある。これは『勇烈新田往来』『楠三代往来』など歴史上の名将を題材とするシリーズの一つとして、文政八年（一八二五）に江戸・山口屋藤兵衛から刊行された。皇后と武内の挿絵の他にも、頭書で朝鮮の歴史や文化を紹介するなど内容が充実している。ただし、神功皇后を主題にした往来物はこれ以外なく、次節で論じる絵本読本で大々的に扱われることになる。

### 第三節 絵本読本

近世後期には、平易な文章と多くの挿絵を特徴とする、対外戦争関連の絵入読本の刊行が顕著になる。<sup>61</sup> 絵本読本とは、それまで武者絵本等に散在していた武者の表象を統一した筋立てに編成、あるいは新たに本文から絵画化したメディアで、神功皇后伝説を素材・主題とするものも現れた。

代表的な作品に、天保一三年（一八四二）に大坂・岡田屋茂兵衛から刊行された『神功皇后 三韓退治図会』<sup>62</sup> 全五巻（山月庵主人著・葛飾北斎画）がある。同作については金時徳氏の研究があり、『朝鮮軍記大全』など朝鮮軍記物から人物や場面を借り、内容や描写が従来の作品と比較して各段に豊富な点や、刊行の背景として天保一二年の朝鮮通信使大坂易地聘札計画が指摘されている。<sup>63</sup>

日本に侵攻した新羅人の毒矢に当たり、臨終間際の仲哀から仇討を頼まれた皇后が、「至尊の御身も愛別の涙は同じ露時雨。羅綾の袖におきかねて。涙と共に曰ふには。よしや女の身なりとも。緊要の時は箭先に立御身代をもつとむべく」と涙ながらに出兵を決意する場面は、女訓書や武者絵本にみられた仇討としての解釈を叙情的に描きかえており、より娯楽性が強まっている。また、巻一で景行天皇時代における日本武尊の西征・東征の物語が「征伐」の前史として語られている点は、第二節の歴史科往来物でみた系譜的な歴史叙述と相通じるものである。なお、同書は明治十九年（一八八六）に京都・山田駈々堂から、翌二〇年には東京・村山銀次郎から改作・

復刻版が刊行されている。

神功皇后と時代の近い日本武尊のみならず、聖徳太子との関連付けも行われた。享和四年（一八〇四）の若林葛満『聖徳太子伝図会』<sup>64</sup>（江戸・須原屋茂兵衛ほか四書肆、京都・出雲寺文治郎、肥前佐賀・紙屋惣兵衛、大坂・榎並屋小兵衛ほか二書肆）巻四では、「任那三韓帰化来由の事」の項で推古朝時代に起きたという新羅侵攻の先例として三韓征伐をあげる。見開きの挿絵は名所図会風の鳥瞰図で、右端には朝鮮半島に向かう龍頭の神功皇后軍船が、左側には新羅の王朝府が広々と描かれている。

幕末期に異国合戦物語が立て続けに刊行される中、『絵本朝鮮征伐記』<sup>65</sup>という従前の朝鮮軍記物と比較して神功皇后に一定量の記述を割り挿絵を掲載する絵本読本が登場した。前編は嘉永六年（一八五三）に大坂、名古屋、江戸の約一五書肆から刊行され、編者は水戸藩に出仕した鶴峯戊申である。巻二の「従日本攻三韓初の事」では、秀吉の朝鮮出兵の先例として三韓征伐をあげ、挿絵には海戦に臨む皇后が描かれている。

以上、近世後期の書物における神功皇后記事をみてきた。秋里籬島が一八世紀末に名所図会の成功から実録・軍記物の図会化として『絵本朝鮮軍記』を刊行したことから、名所図会の延長線上に絵本読本が位置づけられているが、<sup>66</sup>同時代の流行ジャンルに記事がみられたように、神功皇后像は出版界の動向に規定されつつ変容していた。また、歴史科往來物のような庶民の手習書で国史の系統的叙述

が模索される中、絵本読本等他ジャンルにおいても、従来からみられた豊臣秀吉に加えて、日本武尊や聖徳太子、ひいては薩摩藩による琉球侵略<sup>67</sup>など、他時代の人物・事件との関連付けが盛んに行われていた。こうした系譜的な国史叙述の模索の先に、明治期以降の歴史叙述が展望できよう。

#### 第四節 近世後期における神功皇后図像の特徴

最後に、一八世紀後半から一九世紀の神功皇后像の傾向として以下の三点を指摘したい。

第一に、E「戦闘」図とF「三韓王の降服」図の割合が高まる点である（表2）。近世後期には、軍記物の影響を受けた絵本読本や、国史上の画期として三韓征伐を位置づける歴史書で、戦況を直接的に表現した場面が好まれた。その背景には、寛政二年（一七九〇）の寺沢昌次著『絵本武勇大功記』をはじめ、一九世紀前後に挿絵が豊富な朝鮮軍記物が相次いで刊行されたことや、文化露寇事件を題材にした『北海異談』（南豊亭栄助著）で三韓征伐と秀吉の朝鮮出兵が論じられたように、<sup>68</sup>同時代の対外情勢への反応が想定できる。これらを背景に、異国に勝つ軍記物として三韓征伐伝説への需要が高まったと考えられる。

またそこでの描写は、軍記物や名所図会、浮世絵の影響でより緻密化・逼真化する。『絵本朝鮮征伐記』は、従来の朝鮮軍記物と比べて海戦の挿絵が多く、近世末期の浮世絵の影響で戦闘をリアルに

表現する接近戦の構図を多用しており、神功皇后の海戦を描く巻二「従日本攻三韓初の事」の挿絵も、接近戦の構図と緻密な描写が特徴である。『神功皇后 三韓退治図会』の計二一枚の挿絵の中には、皇后が海戦で宝珠を駆使して敵軍を皆殺しにする場面や(図5)、虚偽の降服をした新羅国王を武内宿祢が斬首する場面など、戦場の流血が描かれるのも、血なまぐさく迫真的な表現が特徴的な同時期の出版・絵画界の傾向と連動したものであろう。

第二の傾向は服飾表現に関わり、神功皇后時代の風俗を意識した図像が現れる点である。『大日本国開闢由来記』巻二の図「新羅王神功皇后に帰順奉し処」には、ミヅラという古代男性の髪型に唐風の袍と袴を着た皇后がみえる(図6)。弘化四年(一八四七)に岩瀬涼仙(山東京山)が著した随筆『歴世女装考』巻三の「神代より髪風の風一変したること」で神功皇后の髪型について考証されているように、近世後期における国学の展開や〈古代〉考証の流行が背景に考えられる。第三の点も服飾表現に関する変化で、男性天皇装束姿が現れる点である。安永八年(一七七九)原板の手嶋堵庵作・下河辺拾水画『女訓姿見 女前訓躰種』(大坂・河内屋茂兵衛、江戸・岡田屋嘉七ほか三書肆、京



図7 安政6年(1859)『武者かゞみ』(国立国会図書館デジタルコレクション)

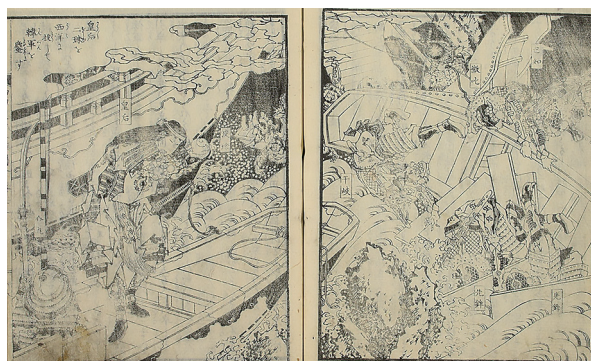


図5 天保13年(1842)『神功皇后三韓退治図会』巻三「皇后二珠を西洋に投じて韓軍を蕩す」(早稲田大学図書館)



図6 万延元年(1860)『大日本国開闢由来記』巻五(早稲田大学図書館)



都・吉野屋仁兵衛)の巻頭絵「神功皇后三韓退治御帰国之図」で皇后は、男性公家装束である袍と緋色の長袴を身に付けている。<sup>(73)</sup>また錦絵の歌川広重画『播州高砂 尾上相生松の由来』<sup>(74)</sup>や、歌川芳虎画『武者かゝみ』(安政六年(一八五九)、山庄板)で皇后は、日輪の飾り付きの宝冠を被り、龍・雉・虎や日形の模様の袍に平緒を垂らし、緋色の長袴を着ている(図7)。実際、近世の天皇即位式で着用された礼服には類似の刺繍が施され、冕冠には日輪や玉の装飾が付いており、<sup>(75)</sup>現実の天皇装束とリンクするのである。

ここで、ほぼ同時期に百人一首絵の持統天皇像が男帝姿で描かれる現象を指摘した、武田佐知子氏の研究が参考になる。百人一首絵の持統は、鎌倉時代以来は十二単という平安時代の風俗であったが、近世中期以降には冕冠や「黄櫨染御袍」を着た男帝装束で描かれるという。<sup>(76)</sup>これは神功皇后や持統天皇にとどまらず、皇極天皇像<sup>(77)</sup>や、『百人女郎品定』・『女教文海智恵袋』<sup>(78)</sup>の女帝像にもあてはまり、男帝装束を身に着けるものとしての女帝(またはそれに準じる女性統治者)像がある程度共有されていたことを示唆している。

さらに、御簾を用いることで身体を直接描かない神功皇后表現が『百人一首』<sup>(80)</sup>(近世後期成立)の付録「本朝賢女伝」や『女教文海智恵袋』付録「本朝名女伝」の挿絵にみえる。百人一首絵の天皇表現には、直衣の下に緋色の長袴を履く「御引直衣」という天皇特有の着付けや、几帳・御簾や縹縹縁の畳を使い天皇の身体を描かずにその存在を強調する方法があるが、<sup>(81)</sup>これらの指標はまさに、以上みて

きた神功皇后表現と重なる。近世の年代記に「人皇十五代」として定着した神功皇后は、近世後期には絵画表現において「天皇」「女帝」として現れるのである。

水戸藩彰考館の『大日本史』が、神功皇后を歴代天皇紀から除外して以降、思想家や知識人ではそれに賛同する見解が支配的になるといわれる。<sup>(82)</sup>ところが一方で、右でみた庶民の書物や錦絵には天皇装束の神功皇后像が登場していた。また、公家鑑という近世前期から民間で刊行された、朝廷人事の人名鑑にも興味深い傾向が現れる(表1参照)。文政九年(一八二六)の『万代雲上明覧』<sup>(83)</sup>(香菓園、河南四郎衛)の頭書の年代記に「十五代神功天皇」が現れて以降、天保八年(万延元年(一八三七)六〇)に毎年刊行された『雲上明覧大全』<sup>(84)</sup>の年代記には「十五代神功皇后」、慶応三年増補改正版『雲上便覧大全』<sup>(85)</sup>の付録「帝陵略記」には「十五代 女帝始メ 神功皇后」とみえる。思想家の傾向とは反比例するかのようになり、民間メディアでは神功皇后を「天皇」もしくはそれと同然に扱う傾向が強まっていたのである。

### おわりに

本稿では、書物の中の近世神功皇后像の特徴・類型とその変遷を明らかにしてきた。書物・出版文化が発展する過程で、節用集や年代記、女訓書、武者絵本に始まり、名所図会や往来物、絵本読本と

いった、各時代を代表するジャンルで伝説は表現され、読み替えられていた。従来の研究では、「朝鮮蔑視」的神話として受容されたと表層的・単線的に評価される傾向があったが、書物における神功皇后像は、時代に特有のジャンルや出版界の傾向、社会・文化のあり方に規定されながら形成され、段階的に変化していたことを強調したい。

さて、近代になると神功皇后は、例えば明治期の女権拡張運動では男女同権の歴史的根拠とされる一方で、<sup>(86)</sup>明治政府による国歌の作成過程では、「男にまさる」存在がやがて問題視され政治シンボルとして浮上と後退を経験したように、<sup>(87)</sup>新たな展開を迎えるのである。

#### 註

- (1) 長志珠絵「ナショナル・シンボル論」『岩波講座 近代日本の文化史 三』岩波書店、二〇〇二年等。
- (2) 塚本明「神功皇后伝説と近世日本の朝鮮観」『史林』七九・六、一九九六年、金光哲「中近世における朝鮮観の創出」(校倉書房、一九九九年)、高寛敏「神功皇后物語の形成と展開」『東アジア研究』三八、二〇〇三年等。
- (3) 永瀬康博「神功皇后伝説の近世的展開」(御影史学研究会編『民俗の歴史的世界』岩田書院、一九九六年)、久世奈欧「近世く近代初頭における神功皇后伝承」『史林』九八、二〇一五年等。
- (4) 佐伯真一「神功皇后伝説の屈折点」同『軍記物語と合戦の心性』文学通信、二〇二一年、初出二〇一八年。
- (5) メラニー・トレーデ「近代国家の象徴としての古代女神」(鹿島美術財団法人報)二三、二〇〇五年)、村山隆拓「大日本帝國政府企業公債イメージ」
- (6) 『武蔵文化論叢』七、二〇〇七年等。
- (7) 鍛冶宏介「江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像」『日本史研究』五七一、二〇一〇年。
- (8) 位田絵美「挿絵解釈の研究」和泉書院、二〇二〇年。
- (9) 『節用集大系』全一〇〇巻(大空社、一九九三〜九五年。以下「節大」と略記)、石川松太郎監修『往来物大系』全一〇〇巻(大空社、一九九二〜九四年。以下「往大」と略記)、『江戸時代女性文庫』全一〇〇巻(大空社、一九九四〜九八年)、江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典』全九巻(大空社、一九九三〜九四年)、小泉吉永改題『江戸時代庶民文庫』全八五巻(大空社、二〇一二〜二〇年)、『日本名所風俗図会』全一八巻(角川書店、一九七九〜八八年)等。
- (9) 国立国会図書館、国文学研究資料館、早稲田大学図書館、立命館大学ARC、東京学芸大学図書館の各種データベースを用いて調査した。
- (10) 坂本太郎他校注『日本古典文学大系六七 日本書紀 上』岩波書店、一九六七年。
- (11) 前掲註(4)。
- (12) 多田圭子「中世における神功皇后像の展開」『目白国文』三一、一九九三年。
- (13) 宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上・中・下・附載一・二、『美術研究』三三三・三三五・三三六・三三九・三四〇、一九八五〜八七年。
- (14) 渡辺雄二「九州の八幡縁起絵」『仏教芸術』一八一、一九八八年。
- (15) 奈良国立博物館編『社寺縁起伝』(一九七五年)、『新修日本絵巻物全集 別巻二』(角川書店、一九八一年)、中野幡能編『八幡信仰事典』(戎光祥出版、二〇〇二年)等を調査した。
- (16) 鈴木彰「八幡愚童訓」の一側面」張龍妹・小峰和明編『アジア遊学二〇七 東アジアの女性と仏教と文学』勉誠出版、二〇一七年。
- (17) 横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集成』一、大岡山書店、一九三七年。



- (18) 中野幸一編『奈良絵本絵巻集』九、一九八八年。
- (19) 小野尚志『八幡愚童訓諸本研究』三、弥井書店、二〇〇一年。
- (20) 佐藤貴裕『節用集と近世出版』和泉書院、二〇一七年。
- (21) 『国立国会図書館岡田希雄旧蔵本 節用集』港の人、二〇一一年。
- (22) 京都大学文学部国語国文学研究室編『節用集 経亮本』臨川書店、一九七四年。
- (23) 『節大』一一。
- (24) 『節大』二二。
- (25) 国立国会図書館所蔵。
- (26) 同右。
- (27) 『節大』三二。
- (28) 佐藤貴裕「早引節用集の流布について」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』一一、和泉書院、一九九〇年。
- (29) 『節大』三四。
- (30) 『節大』三六。
- (31) 木場貴俊「可視化する日本史」石上阿希・山田奨治編『文化・情報の結 節点としての図像』晃洋書房、二〇二二年。
- (32) 早稲田大学図書館所蔵。
- (33) 国立国会図書館所蔵。
- (34) 前掲『江戸時代女性文庫』一一。
- (35) 金永昊「神功皇后の朝鮮半島征伐譚」『東北学院大学教養部論集』一七一、二〇一五年。
- (36) 『節大』三五。
- (37) 『往大』九五。
- (38) 『往大』八六。
- (39) 『往大』九五。
- (40) 早稲田大学図書館所蔵。
- (41) 前掲『江戸時代女性生活絵図大事典』九。
- (42) 『往大』三二六。
- (43) 立命館大学A R C古典籍ポータルデータベース公開。
- (44) 鈴木よね子校訂『只野真葛集』国書刊行会、一九九四年。
- (45) 木村八重子「武者尽くし考」『日本の子どもの本歴史展 図録』一九八六年。
- (46) 早稲田大学図書館所蔵。
- (47) 立命館大学A R C古典籍ポータルデータベース公開。
- (48) 永田生慈監修『北斎の絵手本』二、岩崎美術社、一九八六年。
- (49) 前掲『北斎の絵手本』五。
- (50) 拙稿「近世における神功皇后「アユ釣り占い」伝説の展開」『史観』一八六、二〇二二年。
- (51) 前掲『日本名所風俗図会』一一。
- (52) 前掲『日本名所風俗図会』一五。
- (53) 『往大』四三、三頁。
- (54) 早稲田大学図書館所蔵。
- (55) 『往大』四七。
- (56) 清水光明「尊王思想と出版統制・編纂事業」『史学雑誌』一二九・一〇、二〇二〇年。
- (57) 『往大』四七、「皇国千字文解」の内容解説。
- (58) 『往大』四九。
- (59) 同右。
- (60) 小泉吉永・石川松太郎監修『稀覯往來物集成』七、大空社、一九九六年。
- (61) 金時徳『異国征伐戦記の世界』笠間書院、二〇一〇年。
- (62) 早稲田大学図書館所蔵。
- (63) 金時徳「近世後期における三韓軍記物の展開」(前掲註(61)所収)。
- (64) 国文学研究資料館所蔵。
- (65) 国文学研究資料館新日本古典籍データベース公開。
- (66) 井上泰至「転化していく戦争のイメージ」井上泰至・金時徳『秀吉の対

- 外戦争…変容する語りとイメージ』笠間書院、二〇一一年。
- (67) 詳細は、目黒将史『薩琉軍記論』文学通信、二〇一九年。
- (68) 金時徳「フヴォストフ事件と『北海異談』」井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版、二〇一六年。
- (69) 前掲註(66)。
- (70) 金時徳「壬辰戦争はどのように描かれたのか」田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、二〇一五年。
- (71) 前掲『江戸時代女性文庫』一八。
- (72) 『往大』九〇。
- (73) 男性装束については、井筒雅風『日本服飾史 男性編』(光村推古書院、二〇一五年)を参考にした。以下同じ。
- (74) 立命館大学A R C浮世絵ポータルデータベース公開。
- (75) 武田佐知子・津田大輔著『礼服』(大阪大学出版会、二〇一六年)の第十二章「江戸時代中期以降の礼服」。
- (76) 武田佐知子「男装の女帝」同『衣服で読み直す日本史 男装と王権』朝日新聞社、一九九八年。
- (77) 北尾雪坑斎画『女小学教草』宝暦一三年(一七六三)、大坂・敦賀屋九兵衛・国文学研究資料館新古典籍総合データベース公開。
- (78) 西川祐信画、享保八年(一七二三)、京都・八文字八左衛門…早稲田大学図書館所蔵。
- (79) 長谷川妙貞画、寛延二年(一七四九)、大坂・成井茂兵衛…東京学芸大学望月文庫デジタル資料。
- (80) 前掲『江戸時代女性生活絵図大事典』九。
- (81) 山本陽子「百人一首絵の天皇表現」同『絵巻における神と天皇の表現』中央公論美術出版、二〇〇六年。
- (82) 吉井良隆「近世における神功皇后観」神功皇后論文集刊行会編『神功皇后』皇学館大学出版部、一九七二年。
- (83) 宮内庁書陵部所蔵。

- (84) 深井雅海・藤實久美子編『近世公家名鑑編年集成』一六〇、柘風社、二〇一一年。
- (85) 同右、二四、二〇一二年。
- (86) 陣内恵梨「神功皇后画像の再検証―女権拡張運動と『女学雑誌』における「女帝」の読み替え―」『ジェンダー史学』一八、二〇二二年。
- (87) 長志珠絵「国歌と国語」歴史学研究会編『講座世界史 四』東京大学出版会、一九九五年。

【付記】 本論文は、第一四四回「書物・出版と社会変容」研究会例会(二〇二一年七月三日、於オンライン)での報告をもとに執筆した。例会では多くの貴重な意見を賜った。主催者・参加者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたい。